

令和元年6月20日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21407

研究課題名（和文）ベルギーの2つの民族運動における言語の役割についての研究

研究課題名（英文）Role of Language in Two National Political Movements in Belgium

研究代表者

石部 尚登 (ISHIBE, Naoto)

日本大学・理工学部・助教

研究者番号：70579127

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：ベルギーの両民族運動 フランデレン運動とワロン運動 は、自らに土着の言語が存在することを明確に認識しながらも、共に隣国の言語（あるいは隣国と共通の言語）を「自らの言語」として利用して運動を展開した。こうした言語選択の背景には、19世紀のベルギーという文脈において運動を進める上で、言語の「威信」を最大限利用することが是が非でも必要となる状況が存在したこと、それ故に隣国言語の選択が不可避であったことを明らかにした。また、そうした隣国言語の取り込みに際して、双方独自の「言語/方言」意識の構築が重要な役割を果たしたことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のフランデレン運動とワロン運動の研究では、とりわけその対抗性が過度に強調される傾向があったが、まさにそうした「対抗性」が隣国の言語を「自らの言語」として採用した主要因であったことを示したことに意義がある。また、「言語/方言」意識の構築の観点から両民族運動にとっての「言語」を捉えることで、時代や地域をこえた他の様々な民族言語運動（地域文化復興運動・民族自立運動・植民地解放運動など）と同一の構造で理解することが可能となる。また、19世紀の外交言語を主題とした研究、とりわけ19世紀中葉の日本とベルギーの外交交渉における言語使用についての研究へと道を拓いた点にも学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Two national political movements in Belgium, called the Flemish Movement and the Walloon Movement, acknowledged clearly that they had indigenous languages. However, they developed the movements by adopting a language from the neighboring country as their “own language.” This study shows that the choice of language was due to circumstances in Belgium during the 19th century, where both movements had to optimize the use of the “prestige” of grand languages to fight against an opponent and materialize their claims. Moreover, it also shows that when adopting a language of the neighboring country, a construction of particular “conceptions of language/dialect” on both sides is crucial.

研究分野：社会言語学

キーワード：ベルギー フランデレン運動 ワロン運動 言語運動 民族運動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 2014年のスコットランドでの英国からの独立を問う住民投票、また翌2015年の独立賛成派が勝利したカタルーニャ自治州議会選挙(さらにはそれに続く独立の賛否を問う住民投票)など、EUの東方への拡大が続く傍らで、その超国家的な理念ゆえに西欧で「静かなる独立運動」が生じている。これらの民族独立運動において、それぞれアルバ語(スコットランド・ゲール語)とカタルーニャ語という固有の「自らの言語」の存在が、その主張に根拠を与えている。19世紀以降、言語は民族集団の「紐帯」、「境界標識」として民族運動において中心的な役割を果たしてきた[1]

(2) そうした分離独立の動きは、独立以来「言語戦争」とも称される激しい言語対立を経験してきたベルギーでも見られる。北部フランデレンの分離独立を求める声が高まりをみせている。ただし、19世紀に起源をもつフランデレンの民族運動は、固有の言語ではなく隣国オランダと言語を共有している点で前述の二地域の運動とは異なる。また、その対抗運動として19世紀末に誕生した南部のワロン運動も同様に固有のワロン語を「自らの言語」としなかった。フランデレン運動はフランデレン語ではなくオランダ語の、ワロン運動はワロン語ではなくフランス語のための運動であった。

(3) 両民族運動については多くの研究の蓄積があり、それぞれ『新・旧フランデレン運動百科事典』、『ワロン運動百科事典』という集大成的な百科事典も刊行されている[2][3][4]。しかしながら、それらを含めた従来の両民族運動についての研究では、両運動がそれぞれオランダ語とフランス語のための運動であることは自明の前提とされていた。両運動にとっての言語の意味や、そもそも隣国の言語を「自らの言語」として採用、共有するに至った背景が問われることはなかった。

2. 研究の目的

(1) そこで本研究では、ベルギーの両民族運動は、一般的に受け入れられている言語と民族の関係から外れる展開を経験してきたものの、そうした特殊性こそがベルギーの言語問題、さらには昨今の政治的対立の根底に存在するとの立場に立ち、ベルギーの言語問題の包括的な理解のために、申請者がこれまでベルギーの言語問題について積み重ねてきた調査・研究の経験を活かし、両運動に関する資料の分析を中心として、フランデレン運動とワロン運動の特殊性について考察する。

(2) 具体的な研究課題は以下の二点となる。

「隣国の言語を「自らの言語」として採用した背景を明らかにする」

運動の発生期において、「フランデレン語」と「ワロン語」の存在は明確に意識されていた。他の民族運動と同じように、両民族運動共に土着の固有の言語を「自らの言語」として造成・整備し、それを基盤に運動を展開する可能性は十分に存在した。しかしながら結果として、両運動ともに言語規範の参照点を国外に求めることになり、またその主張には矛盾(『誰のものでもない』しかし『全ベルギー人のもの』であるフランス語)をはらみながらも、隣国の言語を運動の拠り所として採用した経緯や時代的条件を明らかにする。

「隣国の言語の採用が後の運動の展開に与えた影響を明らかにする」

両民族運動共にその初期において先述の選択が行われたのは歴史的事実である。しかし、その後両運動の対立が先鋭化する時期においてさえ、固有言語の「再」採用を求める主張が定期的に繰り返された。そうした主張と対峙しながらも、隣国の言語を基礎としてそれぞれ「フランデレン人」と「ワロン人」を創造していった過程を解明する。また同時に、そうした民族創造の過程が本来の土着の言語に与えることになった影響を、「言語/方言」問題の観点から明らかにする。

3. 研究の方法

(1) まず、本研究の準備作業として、19世紀以降のロマン主義の影響を受けた西欧の運動(フリースラント語やプロヴァンス語などの復興運動)、第一次世界大戦後に中・東欧で多くの新興国家を誕生させた運動(新しい「国語」創造運動)、植民地解放運動と結び付いた運動(インドネシア語の創造を基盤とする独立運動など)など、時代・地域を超えた様々な民族(言語)運動における言語の役割についての情報を収集し、運動と言語の関係について整理を行う。

(2) その上で、ベルギーの2つの民族運動を対象として、未刊行のものを含む運動のパンフレット、両言語圏の新聞記事、運動団体刊行の雑誌・機関誌(紙)(具体的には、フランデレン運動では『今日から明日へ Van Nu en Straks』や『民族 Het Volk』など、ワロン運動では『ワロンの防衛 La Défense wallonne』や『ワロンの魂 L'Âme wallonne』など)などの一次資料の収集を行い、それと並行してそこに現れる言説の分析を行うことで、上記の2つの課題を明らかにする。

(3) 最終的に上記の(1)と(2)の成果を合わせて、ベルギーの両民族運動の特殊性を明らかにし、

さらに言語を基軸として展開された古今東西の様々な民族運動の中に、ベルギーの両民族運動を位置づける。

4. 研究成果

(1) 研究期間中、国内において様々な民族運動に関して文献調査を行うとともに、定期的にベルギーを訪問し、主としてベルギー王立図書館、ブリュッセル自由大学およびルーヴァン・カトリック大学の付属図書館で資料の収集を行った。また、研究の進展に従い、19世紀におけるベルギー外交における言語使用についての調査が必要となり、ベルギー外務省外交文書館においても資料の収集を実施した。収集した資料の分析を通して、先述した2つの研究課題について、それぞれ以下のことを明らかにした。

(2) ベルギーの両言語運動が共通してもつ普遍的な側面と特殊な側面を理解することを目的に、時代・地域を超えた様々な民族運動に関して、それらの民族(言語)運動における言語の役割について整理を行った。その結果、地域(文化)復興運動、「民族自決」運動、植民地解放・脱植民地運動と、18世紀末にロマン主義の影響を受け西欧を舞台に発生し、東方、世界中へと拡大していった民族運動において、「自らの言語」の存在が大きな位置を占めていたことをあらためて確認できた。ウクライナ語(ロシア語)、ノルウェー語(デンマーク語)、インドネシア語(マレー語)、ラオ語(タイ語)の「造成」など、相対的に小さい言語的差異を利用した「自らの言語」の確立を成果とする運動も、時代をこえて見られた。一方で、例えば宗教などが運動の紐帯として用いられることにより、時代または地域によっては言語の要求が前面に現れてこない運動も確かに存在した。しかし、その場合でも、自らだけが伝統的に有してきた共通の言語の存在は前提とされており、決して運動において言語の存在が無視、または軽視されているわけではないことも示した。

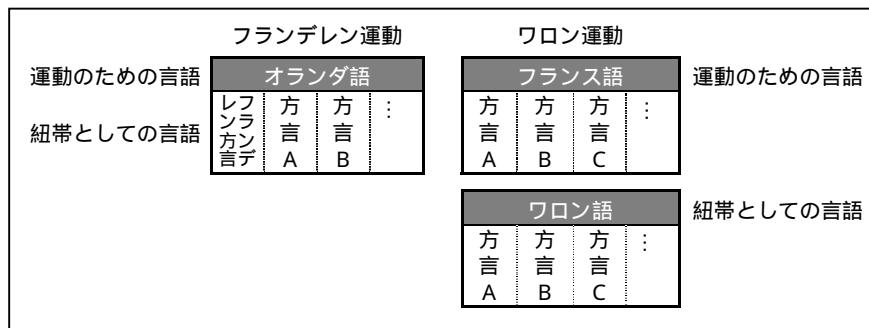
(3) ベルギーの両運動については、運動家の発言や運動の記録・パンフレットなどの資料分析を通して、右表のように両運動の共通点と相違点を整理した上で、以下の3点を明らかにした。

	フランデレン運動	ワロン運動
起源	ベルギー独立 (1830年)	19世紀中葉
特徴	文化運動 政治(権利要求)運動	政治運動
	対抗運動	
規模	多数派	少数派
状況	被抑圧	抑圧
性格	言語運動	
土着言語	認識	
威信言語	隣国言語	

第一に、両運動とも主張の軸に隣国の言語(あるいは隣国と共通の言語)を利用しながらも、同時に自らに土着の言語が存在していることもまた明確に認識しながら運動を展開していたことを明らかにした。具体的には、フランデレン運動では独立間際にフランデレン州の言語変種を基にした正書法制定への動きが存在し、一方でワロン運動ではその政治的結集を目的としたワロニー会議などで繰り返しワロン語の独自性とフランス語の優位性が繰り返し強調された。こうした言語認識はフランデレン運動とワロン運動の両運動に共通するものであり、上記(2)の時代・地域を超えた様々な民族運動に関して確認した事項とも合致するものでもある。

第二に、そうした隣国の言語の採用の背景には、19世紀のベルギーという文脈において民族運動を展開する上で、当該言語の「威信」を最大限利用することが是が非でも必要となる状況が存在したと、それゆえに隣国言語を「自らの言語」として採用する選択自体が不可避なものであったことを明らかにした。この点もまた両運動に共通したものであった。従来はフランデレン運動とワロン運動の研究では、とりわけその対抗性が過度に強調される傾向があったが、まさにそうした「対抗性」が隣国の言語を「自らの言語」として採用した主要因であったことを示すことができたことに意義がある。

第三に、隣国言語の取り込みに際して、双方独自の「言語/方言」意識の構築が重要な役割を果たしたことを明らかにした(右図)。隣国の言語と本来の土着の言語の関係を双方独自のやり方で解釈を行うことで、



「運動のための言語」と「民族の紐帯としての言語」を矛盾なく結びつけることを可能とした。こうした「言語/方言」意識は、方言の視点から言語政策を再考することで、ベルギーにおける公用語のみを対象とする言語政策が土着の言語を周縁化してきた構造を明らかにした報告者の先行研究[5]においてすでに指摘している言語観と共通するものである。このことが示唆し

ているのは、運動の進展によりフランデレン人とワロン人という現在のベルギーを二分する集団が徐々に作り上げられ、さらにその集団を単位としてベルギーの言語政策が行われてきたという事実である。

以上のような観点からベルギーの両民族運動にとっての「言語」を捉えると、時代や地域をこえた様々な民族言語運動（地域文化復興運動・民族自立運動・植民地解放運動など）と同一の構造でベルギーの両運動を理解することが可能となる。

(4) なお、本研究の派生的な成果として、時代的には 19 世紀において両運動の言語観がより顕著に、またより対比的に現れる傾向があることが確認できたことに加え、こうした同様の傾向が、議論および主張の前提が異なる国内問題に対する両運動の対応よりも、国家として共通認識や行動が必要となる対外的な活動に対する両運動における言及のされ方にも見られることも確認できた。これら 2 つの特徴が重なる 19 世紀の外交言語を主題とした研究、とりわけ 19 世紀中葉の日本とベルギーの外交交渉における言語使用についての研究へと研究を発展させる道を拓いた。

< 引用文献 >

- [1] 石部 尚登、言語運動、世界民族百科事典、丸善出版、2014、pp. 168-169
- [2] Deleu, Jozef et al., Encyclopedie van de Vlaamse Beweging, Uitgeverij Lannoo, 1973-1975、全 2 巻
- [3] Reginald et al., Nieuwe Encyclopedie van de Vlaamse Beweging, Uitgeverij Lannoo, 1998、全 3 巻
- [4] Paul Delforge, Philippe Destatte, Micheline Libon、Encyclopédie du Mouvement wallon, Institut Jules Destrée, 2000-2010、全 4 巻
- [5] 石部 尚登、ベルギーの言語政策 方言と公用語、大阪大学出版会、2011

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

石部 尚登、ワロン語辞書と正書法 非公的言語の書記規範、日本大学理工学部一般教育教室彙報、査読有、104 号、2018、pp. 1-10

ISHIBE Naoto, Le régime de territorialité linguistique et les langues non-officielles en Belgique、La territorialitat lingüística、査読無、2016、pp. 81-91

パトリック・ハインリッヒ、石部 尚登、第三の波の社会言語学におけることばとアイデンティティ、ことばと社会、査読無、18 号、2016、pp. 4-10

[学会発表] (計 5 件)

石部 尚登、フランデレン運動とワロン運動、両運動にとっての「言語」、第 78 回ベルギー研究会ブリュッセル大会、2019.3.7、神戸大学ブリュッセルオフィス (ベルギー)

石部 尚登、1866 年条約以前のベルギーの対日交渉計画と日本認識、第 77 回ベルギー研究会、2018.9.23、長崎大学

石部 尚登、言語の威信 外交言語としてのオランダ語とフランス語、第 73 回ベルギー研究会ブリュッセル大会、2018.3.5、神戸大学ブリュッセルオフィス

石部 尚登、1866 年時点のベルギーにおけるオランダ語、日本におけるオランダ語、第 72 回多言語社会研究会、2017.6.24、東京外国語大学本郷サテライト

石部 尚登、日白修好通商航海条約に関する歴史社会言語学的考察、日白修好 150 周年記念シンポジウム 文化・知の多層性と越境性へのまなざし、2016.12.10、東京理科大学

[図書] (計 2 件)

津田 由美子、松尾 秀哉、正躰 朝香、日野 愛郎、石部 尚登 他、ミネルヴァ書房、現代ベルギー政治、2018、270 (執筆担当 6 章、言語・教育政策、pp. 117-316)

ルート・ヴォダック、ミヒャエル・マイヤー編、野呂 香代子、神田 靖子、石部 尚登 他訳、三元社、批判的談話研究とは何か、2018、399 (担当 8 章、視覚的・マルチモーダルなテキストの批判的分析、pp. 265-300)

6 . 研究組織

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。